



発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第五十六号（一日発行）  
平成六年五月一日

# 北海の古平風土物語 二二二

古平川原に飛行機墜落  
担任・千葉信夫先生（二十一歳）

高橋 源 五口

あの飛行機の墜落事故があつてから二、三日後のこと、事故だけがをした永田飛行士の講演会があつた。

永田飛行士は額に白い鉢巻きをして、左手を白布で包んで首から吊った姿ではあつたが、元氣になつて、会場である小学校の運動場に現れた。

講演の内容は、

・これからの飛行機の役目、利用のこと

・日本をはじめ、世界の国々の飛行機の現状

・今後の飛行機の発達などについてであつた。

この話を聞いた私たちは、飛行機というものはこれから重要なものであり、大事な役目を持っているものだということが分かつたのである。

その後、浜町の横山くん製工

場（グラウンド脇の横山さん宅）の構内で修理をしていた飛行機が、一か月程で修復した。

お盆休みの八月十五日に、あの競馬場の滑走路から威勢よく飛び立ち、町の上空を手を振りながら何度も回り、二度も宙返りを見せてくれて、やがて小樽に向かつて飛び去つて行った。見送りをしていた仲間は、

「よがったなア」

「お（落）じねえがったもなア」と、一安心したのであつた。

しかし、この飛行機にはどこまでも不運がつきまとい、この日、小樽上空で（石膏薬（こ

うやく）や豊心丸（小樽市へ印薬店）の宣伝ビラをまいている時にプロペラが外れて落ち、飛行機は海上に不時着したという。幸いにも港内であつたので

搭乗の二人は機外に出て泳いでいるところを、船に乗った人たちに助け上げられ無事であつたのである。

永田飛行士の運の強いのはつくづく感心させられた事件であつた。

いやはや大変にご難続きの、飛行機にとつての揺籃（よろらん）時代であつた。

—— △示 録 ——

第七師団歩兵第二十五連隊（札幌市外、旧月寒町）で飛行機見学のこと

昭和七年八月、私が札幌師範学校第五学年に在学中のこと。

学校教練科の総仕上げとしての実習で、当時、札幌市外月寒町にあつた歩兵第二十五連隊に入隊した。

この連隊に入隊していた兵たちは、札幌市・石狩・空知・胆振・日高管内に本籍のある者であつた。当時の兵は甲種合格の者ばかりで、なかなか体も頑丈な者ばかりであつた。

たまたま陸軍機（陸軍飛行学校の練習機）が、旭川の第七師団本部からの帰途、月寒の歩兵第二十五連隊に立ち寄り、兵たちに飛行機を見学させることになつた。

この日連隊では、月寒の森練兵場の一角に滑走路を設定し、回りをロープで囲んで飛んで来るのを待った。隊内の見学者は総員二千人数らゐであつた。練兵場の外側では、一般の人たちがひそかに立ち見していた。その数は数百人であつたように思う。

快晴の上空に現れた練習機は上空を何回か旋回し、見事に着陸した。

着陸するやいなや、見学していた兵たちは警戒のロープを乗り越えて、我先にと飛行機目がけて突進したのである。いの一

番に機体にさわつて、それを一

生の記念にするつもりで、上官の制止も聞かずに機体をなで回したのである。

この日の飯時は、飛行機にさわつた話で持ちきりであつた。盲人が、はじめて象にさわつた時の話を思い出した。

練習機は二人乗りで、ズングリした小型機であつたが、多くの兵たちのほとんどが、初めて見る飛行機であつたのである。

私が小学生のころ、古平で飛行機を見てから八年後のことであつた。

# 故石井好作教育長

## の夢を見た?

あまり夢をなど見ない私が、石井教育長の夢を見た。故人となられましたが、生前は随分とお世話になった方です。当時は後志で大物教育長といわれ、実力ナンバーワン、骨太で、かみそりのように切れる方でした。今日ある体育連盟も、実は石井さんのすすめで、昭和三十八年四月に設立されたのです。

あのころは、スポーツも野球

# 故郷を想う福井孝平

が中心で、それでも同好会的なスポーツ団体もありましたが、社会教育・社会体育としての位置付けはチャランポランで、行政的な援助などは無く、各団体バラバラにやっていたのが実情でした。

初代会長は越中庄七さんに、ということ、大沢さんのお力を借りて何べんか私宅に伺った記憶があります。快諾を得て、その後六年にわたって多大のご

尽力をいただいたわけですから。

先日、その越中庄七さんの手記『八十年の歩み』を読んでみましたら、趣味・スポーツのところ、「スキーは大正三年十一月に初滑りをしたので、古平町ではおそらく最初だろう」と、述べておられます。また、町内野球大会での始球式とか、開道百年記念の後志体育大会には团长として参加したことなど、大変懐かしく読まさせていただきました。

今、古平体育連盟のあれやこれやと、少しずつ資料を集めて

ので、そのうちにまとめてみたいと思っております。

故石井教育長さんの夢を見た翌日に、笹川財団の体育館・プール建設内諾の知らせを聞きまして。これは夢ではなかった。

寒暖のはげしき春の居座れる対岸の雄冬嶺かすみ釣り日和



# 古平場所と岡田家

## 『古平場所』の運上金は

[7]

場所を預かっている武士たちが、アイヌとの物々交換のため品物を買入れ、交換した品物を運ぶために船まで用意し、その品物売って利益をあげなければならぬというようなことは厄介で、面倒なことでもあった。それまで商売に何の経験もない武士が、このような交易をやってみたくはなすがなかった。ことわざにも『武士の商法』というが、やっぱり商売は専門の商人に任せるのがいいということになって、一定の権利金を取って、場所の経営は商人に任せることになった。

ところで、その権利金（これを運上金という）だが、古平場所ではどのくらいの額だったのだろうか。

天明五年（一七五二）の鯨場の運上金は百八十両で、これは鯨四百石に相当するといふ。また、それから百年程のちの安政元年（一八五四）の記録を見ると、三百八十九兩二分となっている。

この年、米一石（百五十さ）の値段が江戸で約二・一兩だったというが、日本では、去年から米騒動？ が起きているので値段の比較はちょっと難しい。しかし、この頃の一兩小判はだんだん質が落ちてきていて、小判一枚の金の量目は約一・四gから一・七gぐらいというから時価で換算すると、平均して一兩は約二千円となる。これから計算すると、三百八十九兩余りの運上金というのは、現在の貨幣価値にして約七百七十八万円余りとなるが、今は当時とは何しろ物価が違うので、これはあくまでも単に計算上の話ということである。

安政元年のこの文書には、場所の状況などがいろいろと書かれている。

△ふるさとの群像▽  
——訂正—— 前号で「当主の西島観一さん」とあるのは、「西島新一さん」の誤りです。お詫びして訂正いたします。

# 「兵卒の軍隊日記」

「軍法△△議」にドキッ!

[8]

本間 銀朔

夜の点呼が終わわり、やれやれと一安心していたら班のドアをノックする者がいる。すると班長が、いきなり銃剣術の時に使う木銃を持ってドアの所に立ち「入れ!」と言った。

入って来たのはほかの班の兵隊で、見ると、腰に水のいっばい入った五リットルぐらいのやかんをぶら下げている。と、班長がいきなり、持っていた木銃をその兵隊の目の前に突き出した。驚いてその兵隊が後ろに下がったところ、やかんの水がこぼれ、服や床をぬらした。

「何か悪いことでもしたのか」と班長が聞くと、自分の軍靴の底が破れてしまったので、ほかの班の兵隊の靴を失敬したところそれが見つかり、班長が罰を与えたとのことである。

「この班と、まだほかの班を回って来い!」

と言われたとのことである。見ていて吹き出したくなるような光景であったが、可哀想で

もあり、声を出して笑うわけにもいかなかった。班長が、「ご苦労!」とひとこと言う

と、またやかんを下げたまま出て行った。  
(班長は、前もってこのことを知っていたようだった)  
軍隊では退屈しのぎか、突飛なことをやるものだと思った。

## 石碑を動かす

### 吉田一穂墓碑

場所・町宮墓地高台  
建立・水見 悠々子

残雪もまだ深い三月始めに、札幌から或る詩人が「吉田一穂先生のお墓がある」と聞いて来たのです。が、どこでしょうか」と訪ねて来ました。墓の近くまでの道路は路面が出ていたので、略図を書いて渡しました。

「一穂先生はお酒が大好きだったそうですから、ワンカップでもお供えして来ます」

入隊してから二十五、六日経ったころ、班内で全員が散髪をしてもらった。どうやら隊内に床屋さんで入隊した人がいたようだ。散髪と髭剃りをしてもらったが、軍隊のこととて、乱暴で雑なものであった。痛くても我慢するしかなかった。

私は入隊した時に手帳を持参し、その日にあったこと、訓練その他のことを書き留めていたが、書くところが無くなってしまう。買うことも出来ないでいたところ、ちょうど良いことに、妹の夫である佐藤周治軍曹が第六部隊(砲兵隊)から訪ねて来てくれた。

廊下は毎日雑巾がけしているのに、軍靴のまま入って来たのには驚いた。班長より上官になる。そして班長となにか話をしていった。

不自由していた手帳のことをを頼んだら、軍曹殿のご威光?で次の日早速届けてもらった。ありがたかった。

四月も下旬になったころのある夜の点呼で、班長から、「みんな手帳を見せろ!」と言われ、全員がそれぞれ手帳を出した。教えたことをどれだけ書き留めてあるかを見るためのものであったが、前に並んでいた数人が、何も書いていないということまでやされた。

私もおそろおそろ手帳を出した。私のは、その日のことを日記帖として書いてある。これを見た班長に、「これは駄目だ。こんなことを書いたら、お前は軍法会議に回されるぞ!」と脅かされたが、何事もなく手帳を返してもらいホッとした。



# ふるさととの群像

[6]

## 古平を撮り続けて三十余年 カメラと共々 服部昇司さん

戦後いち早く、当時まだ珍しかったカメラを手にして、古平の写真を撮り続けた人がいる。二面の父さん、と親しまれていた服部昇司さんである。カメラを手にしてからというもの、町内の催し物や、漁でにぎわう港、そして人々の集まる所には必ずその姿があった。

それまでも魚釣りが大の趣味であったが、たまたま手にしたカメラがすっかり病みつきになり、『アサヒカメラ』などを愛読し、自宅に暗室を作り、独学で撮影から写真の処理までを研究した。

こんな時、息子さんたちが贈ってくれたのが、当時最新型のコニカであった。これで撮影の範囲が広がり、写真への執念がいっそう強まっていった。

そのうち、服部さんに刺激を受けてカメラを愛好する人が次第に増え、昭和三十一年にカメラクラブが結成された時には、推されて来て会長になり、自分

の作品を通して熱心に後進の指導にも当たった。

服部さんが撮影の対象にしたのは、もっぱら古平の風物でありそこに生活する人々の姿であった。カラー写真が一般化するなかで、白黒写真にこだわりをもっていた。自分の撮影意図を

## 『婦人参政権・男女平等』

女性議員第一号 平田リキさん

【今日日はこんな日】

昭和22年

日本の敗戦から二か月程たった昭和二十年十月、占領軍は戦後の日本の改革の第一に『婦人参政権』をあげた。そして翌十一月の国会では、早くも婦人参政権と男子の選挙権の年齢引き下げが決定した。とにかくこのころは占領軍の威光か、物事が決まるのが早かった。

しかし国内でも敗戦のわずか十日後には、戦後、代議士として活躍した市川房枝らが、婦人

表現するには、あの白黒の世界が合っていたのかも知れない。そんななか昭和五十七年春の早朝、自転車で撮影に出かけ、交通事故に遭ったのである。家族はもちろん、知人も信じられない事故に驚き悲しんだ。七十七歳であった。

その後、人柄をしのび、写真を愛好する人たちにより『遺作展』が、翌年文化会館で開催されたが、亡き服部さんを惜しむ人たちが会場をうめた。

ご冥福をお祈りいたします。

参政権・男女平等などの実現を政府その他へ申し入れていた。時代は大きく変わり、各地で婦人の政治への進出が目立ち、昭和二十一年四月の戦後第一回の総選挙では、三十九人の婦人代議士が誕生した。市町村議会の選挙にも、今までなかった婦人の立候補が相次ぎ、そのことが関心を集め話題になった。

そのような中で昭和二十二年五月、古平町でも戦後第一回の

町議会議員選挙が行われることになったが、初の女性議員の立候補の噂でもちきりであった。

漁業を背景として、古平の町を支えて来たのは男たちであったし、経済力のある、いわゆる町の実力者になるところがこれまでの考え方であった。二、三人が話題に上ったが、結局、婦人団体が活動してきた平田リキさんが、婦人会などからの支持を受けて立候補した。

定員二十二名に対して二十四名が立候補したが、有権者の半分は女性であり、時代の流れからも、平田さんの当選は間違いないだろうというのが一般の見方であった。歴戦の男性議員も初の女性立候補者を迎えて、何が起きるかわからないと、心中穏やかではなかったようだ。

投票の結果十六位で当選し、ここに古平町始まって以来の女性議員が誕生した。平田リキさんは明治十六年の生まれで、議員に初当選したのは六十四歳の時であったが、この一期限りで引退した。

その後女性の立候補者は無く戦後の混乱期に、女性の権利拡大に活躍した人たちのことを思うといささか寂しい気がする。